

関西の幼児教育・保育系の短期大学 における男子学生の進出の考察

Co-education and Increased Entry of Boys into Colleges of Kindergarten Teachers
and Nursery Nurses in Kansai Region, Japan

佐藤実芳
SATOHI, Miyoshi

はじめに

男女共同参画と機会均等の理念が少しずつ日本社会にも知れ渡り、特に若い世代では従来の性別役割分担意識が大きく変化していると言われる。従来男の職域とされた分野に女性が進出するとともに、女性の職場にも男性が進出するようになった。特に幼稚園教諭と保育所保育士への男性職員の登場は、新しい時代の光景としてメディアなどでもよく取り上げられている。しかし華やかなメディアでの男性保育者等の活躍のシーンの陰には、男性の進出に抵抗する現場の古い体質があることも事実である。

本稿では幼稚園教諭や保育士の養成機関である短期大学での、男女共学の導入と増加する男子学生への対応を、早くから男子学生の受け入れに門戸を開いた関西地方のある短期大学の入学者の分析を通じて検討して、幼児教育や保育現場における男女共同参画社会の実現にむけて克服すべき問題を考察していく。

1. 大学入学における男女の状況

(1) 学部間の男女学生数の均等化

男女の社会や家庭における役割の見直しと均等化が進む昨今、高等教育各機関における男女学生数も次第に均等化が進んでいる。4年制大学への女子の進学率が向上し、逆に女子を主な対象としてきた短期大学では男女共学化への流れが進んでいる。従来男子学生が圧倒的に多かった理工系の分野にも女子学生の進出が著しく、農学部、医学部などでは女子学生はもはや珍しい存在ではなくなり、一定の割合を占めるようになった。そして従来「女性」の領域と考えられていた看護や幼児教育の分野には、逆に男子学生の入学が増加している。

(2) 歓迎される女子学生、敬遠される男子学生

大学の入学において性別に基づく選考や優先的な措置は、時代の流れにそぐわないだけで

なく、男女差別ひいては人権問題にも発展する。そのため男子、女子のいずれかの優先的な入学を認めたり、または入学の門戸を閉ざすということは公然とは行われていない。しかしながら高等教育機関の教員の多くは、授業態度の概してまじめな女子学生の入学を歓迎し、授業への出席状況、受講態度などに問題の多い男子学生をあまり歓迎しないと言われている。特に学生の学力水準があまり高くない高等教育機関では、教員からそのような声を耳にすることがよくある。学力の低い男子学生には、学習意欲や受講態度に問題の多い者が多いからである。

女子学生は概して授業への出席率が高く、喫煙や飲酒の習慣や程度も男子学生よりは深刻ではない。もっとも授業中の私語や携帯メールの使用などにおいては男女どちらのマナーがより悪いかはわからない。とはいえ腕力の強い男子学生に対しては、万一暴力をふるわれるかもしれないという潜在的な恐怖感を感じる場合もあり、教員が強く叱れないということもある。

しかも女子学生の存在はキャンパスを華やかにする。入学式、卒業式などの行事も彼女達の存在が明るい雰囲気を醸し出す。そして20歳ぐらいの大学生では、個人により異なるとはいえ、女性の方が概して教職員に気軽に相談したり話しかける傾向が強い。寡黙な男子学生よりも好まれるようである。

(3) 総合大学の入試における男女の合格率の差（近畿大学を例に）

急激な少子化の進行とともに、大学の多くは学生の確保にしのごを削るようになる。従来は特定の受験教科の筆記試験の成績のみで合否を決めていたが、推薦入試の合格者数を拡大させるとともに、意欲、人物、適性など学力以外のさまざまな要素を入試に導入して、総合的な観点から合否を検討するようになってきた。

特に私立大学では、大学のイメージアップの観点から、まじめで華やかな女子学生の入学を歓迎するといわれる。そもそも特に文科系の学科では、国語や英語などの主要な入試教科は女子が得意な分野であり、入学試験においては女子が多く合格しやすくなっている。それに加えて面接でも女子が男子より好印象を与えることが考えられ、その結果女子の合格率がますます高まることも考えられる。

本稿で扱う近畿大学豊岡短期大学の場合、男女別の入試の合否のデータを公表していない。また同短大ではそもそも近年（1999年度以降）は受験者総数が入学定員を下回るようになり、事実上の全入状態が続いている。仮に男子学生の入学を制限したいと短大側が考えても、経営上受験者を不合格にすることは極めて困難な状況になっている。そのため男女の合格率の差をみるには、一定以上の入試の倍率のある高等教育機関の例を検討しなくてはならない。そこで同短大の姉妹法人¹⁾である近畿大学の全学部の2004年度の入試のデータから、男女の合格率の差を検討してみよう。

表1 近畿大学における女子志願者・合格者（2004年度入試）

学 部	志 願 者		合 格 者	
	人 数	比率 (%)	人 数	比率 (%)
法 学 部	1772	22. 8	515	28. 3
経済学部	1413	13. 4	361	19. 5
経営学部	2514	19. 9	611	25. 8
理工学部	2288	12. 7	654	15. 8
薬 学 部	2940	54. 6	251	59. 5
文芸学部	3713	51. 0	601	55. 4
農 学 部	3233	37. 6	800	44. 1
医 学 部	993	36. 1	88	36. 2
生物理工学部	916	23. 3	294	24. 9
工 学 部	391	10. 5	234	12. 6
産業理工学部	394	19. 8	266	20. 8
合 計	20567	24. 9	4675	25. 9

〔出典〕近畿大学入試ガイド2005

近畿大学は11学部を擁する西日本で最大規模の総合大学である。同大学の女子学生の入試の合格率を検討することは、関西の大学入試の全体像における一種の縮図をみることにもなる。2004年度の近畿大学の入試においては、合計のべ2万人を超える女子学生（全受験生の24.9%）が受験し、4675名（全合格者の25.9%）が合格している。このことから、女子の方が男子よりも合格率が若干上回っていることが分かる。またすべての学部で女子の合格率は男子を若干上回る結果が出ている。近畿大学の受験生については、全般的に受験生の女子の学力平均が男子のそれより高いと考えてよさそうである。

（4）幼児教育・保育系の大学の入試における男女の合格率の差（聖和大学を例に）

① 幼児教育系の大学・短期大学で男子学生が敬遠される理由

幼児教育・保育系の大学・短大は、資格の取得をめざす幼稚園教諭や保育士（保母）が以前女性の職業とされていたため、カリキュラムには女子向けに構成されている要素がある。例えば幼児教育の主要な教科内容（領域）である音楽、図工、体育の3分野のうち、音楽特にピアノの演奏指導を重視している大学・短大は数多い。女子学生にはピアノを子どもの頃に習った者が多いから、男子学生にとっては音楽特にピアノ演奏は相対的に苦手科目となる。一方体力に勝る男子学生が比較的得意とする体育の分野の授業は、ピアノ指導ほどは重視していない幼児教育・保育系の大学・短大が多いとされる。

また社会の男女共同参画化が進む今日にあっても、幼稚園や保育所への男性の就職は依

然困難な面があると言われる。そのため専門職への就職の門戸が狭い男子学生を入学させると、入学後の就職指導がその分大変となり、さらに結果として卒業生の就職率が低下してしまう。学校に対する評価にも影響を与えかねない。

② 男子の入学を制限し続ける幼児教育・保育系の大学・短期大学

幼児教育・保育系の大学・短大では、上述の理由から女子のみを入学させる学校が依然多い。また共学化に踏み切った学校でも、幼児教育・保育系学科のみを女子だけの入学に限定したり、入試科目に音楽実技（ピアノ演奏）などを入れて、男子学生が入学しにくいようにしている学校もある。また中には非公式に（入試要項などには明示されていない）男子学生の入学者数の上限を設定しているとされる学校もあるという。

本稿で検討する近畿大学豊岡短期大学のある関西地域では、幼稚園教諭免許状が取得できる4年制の私立大学は、圧倒的に女子大学が多い。2004年時点で男女共学なのは、四天王寺国際仏教大学（大阪府羽曳野市）と聖和大学（兵庫県西宮市）の2校のみである。そこでここでは男女別の入試データを公開している聖和大学の男女別の合格率を分析して、近畿大学（総合大学）の数値と比較しよう。

③ 聖和大学の男女別の入試合格率

聖和大学はキリスト教系の私立大学で、1941年に保育部を有する聖和女子学院として現在地に設置され、1950年に学制改革で聖和女子短期大学となった。1964年には日本初の4年制の幼児教育学科を設置、1973年にはこれまた日本で最初の幼児教育専攻の大学院（修士課程）を開設している。1982年に大学を男女共学にし、幼児教育系の大学としては大変早い時期から男子の受け入れを行ってきた。このように日本の幼稚園教諭及び保育士養成の最先端をゆく聖和大学の、幼児教育学科への男子受け入れの姿勢は、他の大学や短大に影響を与えらると思われる。まず同大学には教育学部幼児教育学科と人文学部（グローバル・コミュニケーション学科とキリスト教学科）の2学部がある。定員の少ないキリスト教学科以外の2学科の男女別の入試データ（2004年度入試）は、次の表2の通りである。

表2 聖和大学における男女別受験者・合格者（2004年度入試）

	受 験 者				合 格 者				女子 倍率	男子 倍率
	女 子		男 子		女 子		男 子			
	人数	比率 (%)	人数	比率 (%)	人数	比率 (%)	人数	比率 (%)		
幼児教育学科	349	69.9	150	30.1	145	89.0	18	11.0	2.33	8.30
グローバル・コミュニケーション学科	76	48.7	80	51.3	73	50.3	72	49.7	1.04	1.11
両 学 科 合 計	425	—	230	—	218	—	90	—	1.95	2.56

[出典] 聖和大学2005年度入学案内

驚かされるのは、幼児教育学科において、男子の合格率が女子よりも大変低いことである。男子は145名が受験してわずか18名が合格しているに過ぎない。表2には示していないが、同大学の入学案内に記載されている数値では、2003年度が男子は132名受験して合格者23名、2002年度が男子164名受験に対して合格16名と、毎年男子にとっては高倍率となっている。対する女子の合格倍率は2004年度でわずか2.33倍である。

聖和大学の人文学部では、応募者数が定員に対してそれほど多くなく、受験生の大半が合格している。そのせいもあってか、合格率は若干女子が男子を上回る程度である。

近畿大学の場合と比べて、聖和大学の幼児教育学科では明らかに男女の合格率に差がある。その理由としては、幼児教育学科の受験者の中での男女の学力差がまず考えられる。まだまだ学力優秀な男子は幼児教育への進路を選ばないのであろうか。次に考えられる理由は、入試選抜の方法が男子に不利であるということである。同大学幼児教育学科の場合、推薦入試では小論文、グループ遊び、グループディスカッションを課し、一般入試では英語、国語とグループディスカッションを課している。しかしこれらの選考方法では特に男子が不利になるとは思えない。ピアノ演奏のように男女間で明らかに差が出る科目は、同大学の選考方法にはみられない。最後に考えられる理由は、男子の合格に関して女子よりも高い得点を要求していることである。このようなことは大学の慣行として非公開で行うであろうから、詳細は分からない。

とにかく幼児教育の分野で男女共学を早い時期からとりいれた聖和大学においても、男子の入学は大変厳しいという現実を銘記する必要がある。またちなみに同大学に併設されている短期大学部の保育科については、2004年度現在男子学生の入学を認めていない。

2. 関西の私立短期大学幼児教育・保育系学科と共学

元来入学が女子に限られていた保育士（保母）や幼稚園教諭の養成課程²⁾では、男女共学の流れはどの程度進んでいるのであろうか。ここでは関西2府4県の私立の短期大学を対象に、2004年度（平成16年度）の募集要項から各短大の入学定員、入学偏差値、男女共学か別学かについて調べ、次の表3にまとめてみた³⁾。

(1) 男女共学の幼児教育・保育系短期大学の立地と入学難易度

① どの地域に男女共学の短期大学が多いか

関西2府4県では、2004年度39校の私立短大が幼児教育・保育系学科の学生を募集している。その内男女共学の短大は14校であり、全校数の約36%を占める。兵庫県と奈良県では半数の短大が共学である。一方大阪府ではまだ約3分の2が女子のみの入学であり、特に大阪市内の短大では、共学は6校中わずか1校だけである。また兵庫県の共学校6校のうち、人口の多い阪神間と神戸市内の短大は2校のみで、残り4校は丹有、播磨、

表3 関西2府4県の幼児教育・保育系学科を有する短期大学

短大名	学科名	所在地	入学定員	偏差値*	共学別学
滋賀女子短期大学	幼児教育保育学科	滋賀県大津市	150	15	女子
大谷大学短期大学部	幼児教育科	京都市北区	70	14	共学
華頂短期大学	幼児教育学科	京都市東山区	150	14	女子
京都女子大学短期大学部	初等教育学科	京都市東山区	130	9	女子
京都文教短期大学	幼児教育学科幼児教育専攻	京都市北区	160	13	女子
聖母女学院短期大学	児童教育学科	京都市伏見区	130	15	女子
大阪青山短期大学	幼児教育・保育科	大阪府箕面市	150	15	共学
大阪キリスト教短期大学 神学科は共学	幼児教育学科	大阪市阿倍野区	120	15	女子
大阪薫英女子短期大学	児童教育学科幼児教育専攻	大阪市摂津市	100	16	女子
大阪芸術大学短期大学部 他学科は共学	保育学科第1部 保育学科第2部	大阪市東住吉区	100 20	15 18	女子 女子
大阪国際大学短期大学部	幼児保育学科	大阪府守口市	150	16	女子
大阪城南女子短期大学	総合保育学科	大阪市東住吉区	200	16	女子
大阪女子短期大学	幼児教育科	大阪府藤井寺市	100	15	女子
大阪信愛女学院短期大学	初等教育学科	大阪市城東区	100	17	女子
大阪成蹊短期大学	児童教育学科	大阪市東淀川区	220	15	共学
大阪千代田短期大学	幼児教育科	大阪府河内長野市	120	16	共学
関西女子短期大学	保育科	大阪府柏原市	110	15	女子
四条暁学園短期大学 他学科は共学	保育学科	大阪府大東市	100	15	女子
四天王寺国際仏教短期大学部	保育科	大阪府羽曳野市	100	15	共学
常盤会短期大学	幼児教育科	大阪市平野区	300	16	女子
東大阪大学短期大学部	幼児教育学科	大阪府東大阪市	120	16	共学
平安女学院短期大学部	保育科	大阪府高槻市	100	15	女子
芦屋女子短期大学	幼児教育学科	兵庫県芦屋市	50	17	女子
近畿大学豊岡短期大学	幼児教育学科	兵庫県豊岡市	50	17	共学
甲子園短期大学	幼児教育保育学科	兵庫県西宮市	120	15	女子
神戸常盤短期大学	幼児教育科	神戸市長田区	80	14	共学
夙川学院短期大学	幼児教育学科	兵庫県西宮市	240	15	女子
頌栄短期大学	保育科	神戸市東灘区	100	15	共学
聖和大学短期大学部	保育科	兵庫県西宮市	150	15	女子
園田学園女子大学短期大学部	幼児教育学科	兵庫県尼崎市	80	15	女子
姫路日ノ本短期大学	幼児教育科	兵庫県香寺町	100	17	共学
兵庫大学短期大学部	保育科第1部 保育科第3部	兵庫県加古川市 兵庫県加古川市	150 100	15 —	共学 共学
湊川短期大学	幼児教育保育学科	兵庫県三田市	100	17	共学
武庫川女子大学短期大学部	幼児教育学科	兵庫県西宮市	150	9	女子
畿央大学短期大学部	児童教育学科	奈良県広陵町	100	19	共学
奈良佐保短期大学	幼児教育科	奈良県奈良市	100	16	共学
奈良文化女子短期大学	幼児教育学科第1部 幼児教育学科第3部	奈良県大和高田市	100 80	16 —	女子 女子
白鳳女子短期大学	総合人間学科幼児保育専攻	奈良県王寺町	100	16	女子
和歌山信愛女子短期大学	保育科	和歌山県和歌山市	100	16	女子

* 入学難易度は、学研が2003年度の入試の合否状況を参考に作成した「短大合格難易ランカー一覧：教育系統」から転載した。ランクは1-20の20段階で示され、数字の小さい方が難易度が高い。なお兵庫大学の第3部及び奈良文化女子短大の第3部（夜間課程）についてはデータが記載されていない。

但馬地域に立地している。傾向としては、都心部よりも郊外や郡部の短大に共学の学校が多いようである。

② 入学難易度と共学校の関係

現在短期大学の入試の選抜方法は多様である。学力テストのみではなく学習意欲や人間性や職務への適性などが面接で重視される。特に幼児教育・保育関係では、英語、数学、国語といった受験教科だけではなく、音楽などの技能も試験に課される。そのためいわゆる予備校等が主催する模擬試験などから入学偏差値を算出して入学の難易度を推計する手法には、なじまない側面がある。しかしながら数多くの短大の入学難易度を共通の基準で比較する他の手法は目下のところない。そこで現実の難易度とは若干の誤差があるのを承知で、学研が示したランク(表3に掲載)を用いて各校を難易度順に表4に並べてみる。

共学校の難易度は、トップクラスから最下位ランクまで幅広く分布している。だから男女共学と難易度の関係は一概に言えない。しかし17、19の下位ランクの6短大のうち、4校は共学校である。共学校の方が、入学難易度が低い傾向にあるとは言えよう。

表4 入学難易度のランク別に応じて分類した関西の幼児教育・保育系短期大学

難易度のランク	9	13	14	15	16	17	19	合計
共学の短大の校数	—	—	2	5	3	3	1	14
女子短大の校数	2	1	1	11	8	2	—	25
合計	2	1	3	16	11	5	1	39

(ランクの数字が小さいほど、入試の合否の難易度が高い)

(共学・女子短大別)

③ 関西における幼児教育・保育系共学短期大学の共学化の歴史

前述の14短大はいつから男女共学となったのであろうか。歴史の古い順に次の表5にまとめてみた。ただし学生数は全学部(学科)のもので、2003年度の数値である。共学の開始年度については、各短大に問い合わせた。

京都市の大谷大学短期大学部、神戸市の神戸常盤短期大学、頌栄短期大学、これら幼児教育分野の伝統校3校は、開学以来男女共学である。しかしこれらの伝統校の幼児教育・保育系学科に在籍する男子学生の数は、大谷大学短期大学部以外は、それほど多くない。一方で郊外に立地し比較的歴史の新しい短大が、1997年以降から次々と共学に踏み切っている。後者の短大の場合は、都心の短大などに比べて立地上不利な学生募集の観点から男女共学に踏み切って、男子学生の確保を狙ったのではないと思われる。

創設以来男女共学であった上記3短大の場合は、特に確固たる理念があって男女共学にしたのではなく、当初は男子の入学もまれであったろう。むしろ近年男女共学への転換に踏み切った残り11短大の方が、男子学生の多数の入学を意識・期待したと思われる。これらの短大では、男子は教えにくいし就職の世話もしにくいといった教員の声を抑えて、

表5 共学の幼児教育・保育系学科を有する短期大学（2003年度）

短期大学名	共学開始 年 度	共化学の経緯	全学生数	男 子 学生数	男子比率 (%)
頌栄短期大学	1950	創立時より共学	293	10	3.4
大谷大学短期大学部	1966	創立時より共学	560	138	24.6
神戸常盤短期大学	1967	創立時より共学	843	63	7.5
近畿大学豊岡短期大学	1989	女子短大より転換	138	51	37.0
兵庫大学短期大学部	1997	女子短大より転換	667	94	14.1
大阪青山短期大学	1999	女子短大より転換	992	150	15.1
姫路日ノ本短期大学	1999	女子短大より転換	227	30	13.2
大阪千代田短期大学	2000	女子短大より転換	542	87	16.1
東大阪大学短期大学部	2001	女子短大より転換	752	139	18.5
奈良佐保短期大学	2001	女子短大より転換	491	181	36.9
大阪成蹊短期大学	2003	女子短大より転換	1582	52	3.3
四天王寺国際仏教大学短期大学部	2003	女子短大より転換	1182	93	7.9
湊川短期大学	2003	女子短大より転換	400	22	5.5
畿央大学短期大学部	2003	大学開設に伴い短 大を共学化	非公表	非公表	—

学生数は2003年度の数值。全学部・学科の学生数

できるだけ学園の経営にプラスになるよう経営者の考えが優先したと推定される。なお男女共同参画の精神がこれらの短大の共学への方針転換において重視されたかどうかは、定かではない。

(2) 共学の短期大学における男子の歓迎状況

男女共学にしたからといっても、その短大が男子学生を歓迎しているとは単純に判断できない。入学選抜の段階で女子が有利な選抜方法を残している短大も中にはある。特に男子が苦手とするピアノ演奏の実技を入試に課している短大については、男子の入学を制限したい意図が強く感じられる。例えば神戸市の頌栄短期大学は1950年の創設以来男女共学であるが、保育科の受験者全員にピアノ演奏を課しているため、2004年度の在籍学生293名のうち、男子学生はわずか10名だけである。

関西の共学の幼児教育・保育系の14短大の大半は、面接、作文、国語（古文・漢文を除く）のいずれかもしくはその組み合わせを選べば、過酷な受験勉強を要する数学や英語、また理科の各教科を選ばずに入学できるようになっている。少子化に伴う18歳人口の減少と専門学校との競争の激化とで、短大は学生募集に近年苦戦するようになってきた。できるだけ多くの志願者を確保するため、受験勉強の必要な教科を短大が入試から外したのである。

また保育者としての適性は必ずしも受験学力で測れるものではない。各短大が面接で人物を評価し、国語の学科試験や小論文などを通じて受験生の基本的な文章表現力や読解力などを問う方法に選考の比重を移したことには、有意義な一面もある。

前述の共学の14短大のうち、2004年度にピアノ演奏を入試に課しているのは神戸市の頌栄短期大学だけである。同短大は推薦入試・一般入試双方に課している。また大谷大学の短期大学部では、一般入試に英語を課している。それ以外の12短大は、少なくとも入試の必修科目には、勉強嫌いの学生から特に敬遠される科目はない。

3. K短期大学幼児教育学科の男子学生

(1) K短期大学の男女共学への転換の背景

前章2で検討した結果、近畿大学豊岡短期大学（以下K短大と略称する）は、関西の幼児教育・保育系の女子短期大学の中で、最初の1989年に男女共学に転換した短大であることがわかった。関西で次の短大が男女共学に転換するのは、8年後の1997年である。1989年といえば第二次ベビーブームの世代が18歳に達する頃で、短大は多くの志願者を集めていた。K短大はその頃からすでに将来訪れる「短大冬の時代」を予測して、男子学生の募集に着手したと考えられる。

高等教育市場に対する洞察の鋭い経営者の手腕、兵庫県の北部の過疎地に立地する危機感などがそのような決断を可能にしたという。またK短大は通信教育課程を持っている。幼稚園教諭や保母（現保育士）のほとんどが女性の時代でも、私立幼稚園や保育所の経営者には多くの男性がいた。そして彼らの一定数が、職務上幼稚園教諭免許状や保母資格が必要になると、短大の通信教育で取得した。そのためK短大キャンパス内に男性学生がいる光景が、従来から夏のスクーリング時などに見られたのである。このことが教職員の「共学」に対する違和感を和らげたのではないかと考えられる。

(2) 男子学生数の変遷

① 男子受け入れのパイオニアとしてのK短期大学

関西において1989年から1997年にかけては、幼稚園教諭免許状と保母資格を取得できる共学の短大は、K短大を含めてわずか4校である。しかも頌栄短期大学は入試にピアノ演奏を課していて、男子学生は入学しにくかった。だから事実上大谷大学短期大学部、神戸常磐短期大学とK短期大学の3校しか、幼稚園教諭や保育士を目指す男子学生は関西では進学先がなかった。しかし1997年以降になると共学の短大が増加してくる。このような時代の流れを踏まえた上で、K短大の幼児教育学科の男子学生数はどのように推移したのかをみていこう。同短大の各年度の入学者名簿から男子学生の入学者数を割り出し、次の表6にまとめてみた。

表6 K短大幼児教育学科の男子学生の入学者数（1989-2003年度）

入学年度	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
全学生数	62	73	76	73	72	68	70	61	60
男子学生数	0	5	8	7	7	14	2	11	15
男子学生の比率	0%	5.5%	10.5%	9.6%	9.7%	20.6%	2.9%	18.0%	25.0%

入学年度	1998	1999	2000	2001	2002	2003
全学生数	62	41	49	38	47	53
男子学生数	19	20	15	8	11	18
男子学生の比率	30.6%	48.8%	30.6%	21.1%	23.4%	34.0%

② 男子学生の増加傾向

1989年の4月の男女共学の開始年度には、K短期大学幼児教育学科への男子学生の入学はなかった⁴⁾。しかし翌年に初めて5人の男子学生が入学すると、1990-1993年までは5-8名の男子が入学してきた。K短大の幼児教育学科の定員は1学年50名である。受験生が定員を大きく上回っていた1990-1995年の間は、文部省が許容する定員の1.4倍の約70名を入学させていた。そのためこの時期の男子学生の比率は全学生数の1割程度であり、教室の状況は女子学生に男子が散発的に混ざっているという様子であった。当然ながら男子向けのカリキュラム上の工夫などはなされず、従来の女子を主な対象とした教育が行われていたと思われる。

1994年にはじめて二桁の14名の男子学生が入学したが、その中に受講態度の悪い男子学生が数名いたという。そこで初めて教職員の中に男子学生を敬遠する声が出て、翌1995年では入試で女子を優先的に合格させて男子の入学者がわずか2名となってしまったらしい。しかしながら1996年以降は、志願者の総数が減少して、受験生を不合格にしくくなった。その結果1996年以降は男子の志願者もほぼ合格するようになり、男子の合格者は全合格者の2割以上をコンスタントに占めるようになった。特に1999年以降は入学者数が学科の定員50名を割る年度もあり、男子受験生のほぼ全員の入学を認めているのが実状である。

(2) 男子学生の出身地域

それでは男子学生はどの地域から来ているのであろうか。K短大の各年の入学生名簿に記載されている自宅（下宿生の場合は実家）住所に基づき、自宅から通学可能な地域つまり兵庫県の北部と京都府北部出身の学生と、それ以外の地域出身の学生とに分けた。さらに自宅通学圏の兵庫県北部から豊岡市を項目として独立させ、自宅通学圏以外の項目を関西2府4県とその他の地域とに分けた。こうして表7を作成した。

表7 K短大幼児教育学科の男子学生の出身地域（1990-2003年度）

入学年度	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
豊岡市	0	0	0	0	2	0	0
兵庫県北部*（豊岡市以外）	0	1	0	0	0	0	0
京都府北部**	1	2	1	1	0	0	0
自宅通学圏小計	1	3	1	1	2	0	0
自宅通学圏を除く関西2府4県	3	3	5	4	9	1	5
その他の地域	1	2	1	2	3	1	7
自宅通学圏以外 小計	4	5	6	6	12	2	12
男子学生入学者数 合計	5	8	7	7	14	2	12

入学年度	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
豊岡市	0	3	0	4	1	0	0
兵庫県北部*（豊岡市以外）	1	2	0	0	3	1	5
京都府北部**	1	1	4	2	1	3	5
自宅通学圏小計	2	6	4	6	5	4	10
自宅通学圏を除く関西2府4県	8	9	12	8	2	6	5
その他の地域	5	4	4	1	1	1	3
自宅通学圏以外 小計	13	13	16	9	3	7	8
男子学生入学者数 合計	15	19	20	15	8	11	18

*兵庫県北部とは、朝来郡、養父郡、出石郡、城崎郡、美方郡を示す。

**京都府北部とは、福知山市、宮津市、舞鶴市、綾部市、天田郡、竹野郡、中郡、熊野郡を示す。なお郡・市の名称は、2003年時点のものである。

K短大では男子学生の入学者数が、1990年代後半には年を経るごとに増加していた。しかしながら男子学生の主な出身地域は、1990年代とここ数年との間では多少異なってきた。関西に共学の幼児教育・保育系の短大が少なかった1990年代当時は、京阪神を中心とした遠方からの学生が多かった。例えば1993年度入学の7名の男子学生の出身地は、次の通りであり全員下宿であった。

京都市、奈良市、東大阪市、鳥取市、広島県福山市、京都府舞鶴市、兵庫県水上郡

ところが1998年以降は、自宅通学圏の男子学生が一定数以上入学してきている。それに対して遠方からの男子学生は2000年以降、頭打ちかまたは減少傾向にある。例えば2001年入学の8名の男子学生の出身地は次の通りであり、自宅通学の地元出身者が過半数を占めている。

自宅通学5名：兵庫県豊岡市、八鹿町、但東町、養父町、京都府宮津市
下宿3名：滋賀県大津市、大阪府箕面市、広島県福山市

これはK短大が立地する人口の少ない地域でも、一定数の男子高校生が幼児教育・保育の分野を進路として考えるようになったことを意味する。つまり男子が例えば保育士を目指すことがもはや特殊な現象ではなくなったのである。一方遠方からの学生は、新たに共学となった京阪神及びその近郊の他の短大に進学するようになったために近年減少したと思われる。遠方からの男子学生は他の短大の共学化の進展に伴い、今後は入学者が減少するのみではなく、他校の受験に失敗した学生が増加すると予想される。当然ながら学力の低下が懸念される。男子学生の質を保つには、地元の男子学生の入学の増加は望ましいことである。

ともかく男女共学に転換して15年が経過し、ようやくK短大は地域の男子高校生に進路先として認識されてきたようである。

(3) 男子学生の就職先

男子学生の卒業後の進路はどのようであろうか。K短大の卒業生名簿には、卒業生の進路(就職先)が2001年度まで掲載されていた。幼児教育学科の最初の男子学生が卒業した1991年度から、名簿に進路が掲載されている2001年度までの男子学生の就職先を表8に、女子学生の就職先を表9にまとめた。

なおK短大では、卒業式は毎年3月の上旬に行われる。そのため卒業名簿に記載されている就職先は、毎年1月時点のものである。実際にはそれより後に就職が決まる場合がある。そのような点を考慮に入れても、男子学生の就職は女子学生に比べて厳しく、保育者としての道が男子に対しては、まだまだ閉ざされていると言える。保育現場が男性保育者を歓迎しているとは思えないのである。

① 専門職への就職は半数未満

1991年から2001年にかけてK短大を卒業した男子学生101名のうち、子どもに関する仕事に就職した学生は、幼稚園、保育所、児童福祉施設を合計して37名だけである。一方同時期に卒業した女子の場合は、卒業生の58.5%がこれらの仕事に就職している。特に幼稚園に就職した男子は、わずか3名にしかすぎない。

② 進路未定者が多数

男子学生の場合、卒業生の30.7%が進路未定である。女子の場合同時期での就職未定者はわずか12.5%であるから、それだけ男子学生の就職が狭き門だと言えよう。マスコミで男性保育者がもてはやされる一方で、保育者になる夢がかなわない男子学生が多数いる現実を、忘れてはならない。

表8 K短大幼児教育学科男子学生の進路（就職先）（1991-2001年度）

就職先	幼稚園	保育所	児童福祉施設*	その他の業種	進学**	未定	合計
1991	0	1	2	1	0	1	5
1992	1	1	2	1	0	2	7
1993	0	3	0	1	1	1	6
1994	1	0	0	3	1	1	6
1995	1	5	0	2	0	4	12
1996	0	0	0	1	0	1	2
1997	0	1	0	0	1	4	6
1998	0	4	0	3	2	6	15
1999	0	9	0	1	3	2	15
2000	0	3	0	4	4	5	16
2001	0	5	1	1	1	4	12
合計	3	32	5	17	13	31	101
比率（%）	2.97	31.7	4.9	16.8	12.9	30.7	100.0

* 児童擁護施設には、障害児擁護施設、乳児院、学童保育を含む

** 4年制大学への編入及び専門学校への入学

表9 K短大幼児教育学科女子学生の進路（就職先）（1991-2001年度）

就職先	幼稚園	保育所	児童福祉施設*	その他の業種	進学**	未定***	合計
1991	4	20	2	20	3	12	61
1992	2	25	2	27	2	5	63
1993	4	28	2	16	0	8	58
1994	8	24	3	15	5	6	61
1995	6	28	0	8	2	6	50
1996	8	20	6	25	0	8	67
1997	2	18	5	10	4	5	44
1998	2	20	4	4	1	11	42
1999	5	23	6	4	1	4	43
2000	1	11	2	3	3	1	21
2001	2	24	1	4	1	2	34
合計	44	241	33	136	22	68	544
比率（%）	8.1	44.8	6.1	25.0	4.0	12.5	100.0

* 児童擁護施設には、障害児擁護施設、乳児院、学童保育を含む

** 4年制大学への編入及び専門学校への入学

*** 未定には家事手伝いを含む

おわりに

関西地区の短期大学の幼児教育・保育系学科では、1997年以降から共学化が開始されてきた。幼稚園や保育所への男子職員の参入は、男女共同参画社会の理想からは望ましい現象である。しかし現実には志願者の減少に悩み、男子学生という新たな市場を開拓して学生募集に活路を見出そうという、私立短期大学の経営戦略に影響されて、男女共学化が進んでいるように思われる。

他校に先駆けて1989年に共学化に踏み切ったK短大においては、男子学生の数が徐々に増加し、今や全学生数の2割-3割を占めるにいたっている。そして遠方からだけではなく、地元出身の男子学生も増加している。このように増加する男子学生、特に地元出身の男子学生に対してK短大はどのような指導や対応をしたのであろうか。次回にその詳細を分析することにする。

注

- 1) 近畿大学豊岡短大は2004年3月までは、学校法人近畿大学が運営していた。しかし同年4月に学校法人近畿大学弘徳学園が新たに設立され、近畿大学からは経営上独立した。なお校名「近畿大学豊岡短期大学」はそのままである。
- 2) 本稿では、幼稚園教諭免許状及び保育士資格の双方を取得できる学科を対象を限定した。近畿大学豊岡短期大学と同じ資格を取得できる短大の学科を比較検討するためである。なおこれらの学科以外にも、小学校教諭免許状と幼稚園教諭免許状の双方を取得できる教育系の学科や、保育士資格のみを取得できる福祉系の学科がある。
- 3) 「短期大学受験案内2005年度用」晶文社出版、及び、「短大受験案内2005年度用」学研の2冊を参考にした。
- 4) 1989年の男女共学化の初年度、児童教育学科には男子学生の入学はなかった。しかし家政科には同短大初の男子学生が3名入学した。また同短大の幼児教育学科は1991年度以前には学科の名称が「児童教育学科」であった。そして2005年度からは学科の名称を変更して、「こども学科」になる。